

# 英語教育の研究

高梨芳郎

2016年度の英語教育の動向について概観する。文部科学省は、2017年3月31日に、小学校・中学校の学習指導要領を改訂し、公示した。全面実施は、小学校は2020年度、中学校は2021年度からで、いずれも2018年度から各学校の判断で先行実施が可能になる。なお、高等学校は2017年度中に告示し、2022年度から順次導入する。小学校の「外国語活動」は3学年と4学年に移行し、年間各35時間の授業時間数で実施される。新たに、5学年、6学年で教科書を使用して「読む・書く」も含めた教科としての「外国語」が年間各70時間行われる。新語は小学校で「600～700語程度」、中学校で「1600～1800語程度」で、現在中学校1年生の内容のほとんどは小学校に移り、中学校では新たに「仮定法のうち基本的なもの」などが加わる。「話す」が「やり取り」と「発表」の2領域に分かれて4技能5領域となり、「主体的・対話的で深い学び」を目指して授業が実施される。

学習指導要領の改訂には「グローバル人材」の育成を推進する意図がある。小学校での英語教育を拡充強化し、中学校・高等学校での英語教育の高度化を図り、英語教育全体の抜本的充実を目指す計画（「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」文部科学省2013.12）の具体化である。斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司著『「グローバル人材育成」の英語教育を問う（ひつじ英語教育ブックレット）』（ひつじ書房2016.11）は、「グローバル化＝英語化」に異を唱え、「教養」「専門性」「協同性」を備え、母語・外国語の豊かなコミュニケーション能力を有する「グローバル市民」の育成を目指す目的論を展開する。巨視的な視点からの英語教育論には、理論とともに経験に根ざした指導論も欠かせない。若林俊輔著／小菅和也・小菅敦子・手島良・河村和也・若有保彦（編）『英語は「教わったように教えるな』』（2016.6研究社）は若林氏の論考を再録し、紹介した書である。小学校での英語教育を「基本教育の破壊」と断言し、つまずく生徒とともに「英語学習の目的をどうもたせるか」悩み・考え、「英語教育にロマンを」を主張する数々の論考は現在でも示唆に富む。一方で、英語教育の施策や目的論・指導内容・方法論が実効性を確保するためには英語教育現場での堅実な実態把握が必要である。金谷憲・白倉美里・大田悦子・鈴木祐一・隅田朗彦著『高校生は中学英語を使いこなせるか？（アルク選書）』（アルク2017.2）は高等学校での英語授業をサポートするため、全国約5,000名の高校生を対象にして中学校英語の定着度を検証した労作である。中学校英語の定着度には課題が多いとする論の証左とともに、ディクテーション、速読、絵の描写など問題の工夫も見られ、今

## 回顧と展望

後のさらなる継続的・体系的な研究が待ち望まれる。理論・経験(実践)・実証の手堅いサイクルを英語教育(論)・研究に期待したい。

英語教育の研究は広義には第二言語習得の研究でもある。和泉伸一著『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える——より良い英語学習と英語教育へのヒント(アルク選書)』(アルク 2016.4)は、母語習得と第二言語習得の理論、両者の相違点を事例とともに平明に説明し、英語学習と指導へのヒントを与えてくれる。和泉伸一著『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業(アルク選書)』(アルク 2016.4)は、形式・意味・機能のつながり、フォーカス・オン・フォームとそれに基づく指導法、CLIL(内容言語統合型学習)を志向した英語授業を中学校・高等学校での具体例とともに提示して説得力に富む。形式・意味・機能だけでなく、言語と内容も統合する「森から木へ」の視点はこれからの英語授業の在り方の着実な方向でもある。第二言語習得の理論は、英語教師を目指す者だけでなく、本来、誰にでも興味深いテーマである。新多了・馬場今日子著『はじめての第二言語習得論講義——英語学習への複眼的アプローチ』(大修館書店 2016.8)は、第二言語習得研究の基幹的なテーマである母語と第二言語の相互の影響、第二言語習得についての認知的・社会的アプローチ、タスク中心のアプローチ、適性・動機づけなどを読者の目線で語りかけ、複雑系理論の紹介も加え、斬新な解説の書に仕上がっている。若い著者の方々に研究の進展と学生とともに知的成長を図る姿勢を今後も期待したい。

言語学習の基幹は語彙習得である。外国語学習の場合、小学校から大学、成人に至るまで、どのような語彙をどのくらい習得の目標にすべきかは緊要な研究課題である。大学英語教育学会基本語改訂特別委員会著『大学英語教育学会基本語リスト 新 JACET8000』(桐原書店 2016.4)は、中学校・高等学校の検定教科書、高等学校入試問題、大学入試センター試験、TOEFL・TOEIC・英検などの各種検定試験での語彙も分析に加え、日本人の英語学習の実情も考慮しつつ、研究書としての性格も併せて、基本語リストとして 8,000 語を提示した地道な研究である。

英語四技能の手堅い研究・指導の書として、伊東治己著『インタラクティブな英語リーディングの指導』(研究社 2016.7)と門田修平・泉恵美子著『英語スピーキング指導ハンドブック』(大修館書店 2016.5)が出版されている。前者はキーワードを「インタラクション」に据えて「学習者内」、「テキスト内」、「教室内」でのインタラクションでのリーディング指導を著者の豊富な知見・指導経験を土台にして、発問の工夫や和訳の効果的な扱い方などの最近のテーマも含めて、明快に提示した書である。後者は、スピーキング指導の「常識」を QA 形式で整理して「導入」として扱い、続いて教室での個々の指導技術を「実践編」として網羅的に紹介し、「理論編」でスピーキングモデルなどの理論を概説する事典的な書になっている。両書とも教室での指導を再考する際に有益であろう。

## 英語教育の研究

英語教育の研究法は、授業研究一色から量的研究、質的研究、混合法など、次第に精緻になってきている。量的研究法では基盤となる数学的な知見の等閑視、質的研究法では「量的」研究法への接近などが若干気になるが、先ずは研究の在り方、研究法に馴染むことが起点になる。浦野研・亙理陽一・田中武夫・藤田卓郎・高木亜希子・酒井英樹著『はじめての英語教育研究——押さえておきたいコツとポイント』（研究社 2016.8）は、「研究とは何か」、「研究テーマの探し方」、「先行研究の探し方」など土台作りから解説した丁寧な入門書である。研究倫理の問題など必要なテーマも含めて、今後研究を進めたい方、研究の基礎から学びたい方に納得の行くまで個々のテーマで考えさせてくれる得難い書であることに違いない。

ここで海外の研究に目を向ける。第二言語習得を包括的に扱った書として、Muriel Saville-Troike & Karen Barto. *Introducing Second Language Acquisition*. Third Edition (Cambridge Introductions to Language and Linguistics) (Cambridge University Press 2016.12) がある。第二言語習得の基本概念を手際よく整理した後、言語・心理・社会の文脈で第二言語習得を考察し、言語使用と言語知識の関係を示し、言語活動と指導について有益な示唆を与えてくれる。また、実際の言語使用で文脈と文法・語彙の共起関係や使用頻度に着目して言語習得と言語処理をモデル化した用法基盤学習 (usage-based learning) の研究書として、Nick C. Ellis, Ute Römer, & Matthew Brook O'Donnell. *Usage-Based Approaches to Language Acquisition and Processing: Cognitive and Corpus Investigations of Construction Grammar* (Language Learning Monograph) (Wiley-Blackwell 2016.6) がある。言語習得と言語の使用頻度との相関関係は経験的にも頷ける点で興味深い。作業記憶と言語学習の関わりを論じた書として、Zhisheng Wen. *Working Memory and Second Language Learning: Towards an Integrated Approach* (Second Language Acquisition) (Multilingual Matters 2016.6) が示唆的である。作業記憶の理論とモデル、測定法、言語学習での役割から第二言語学習のタスク、適性まで新たな知見を与えてくれる。

言語習得と学習方略、中間言語との関係にも目が離せない。Rebecca L. Oxford. *Teaching and Researching Language Learning Strategies: Self-Regulation in Context*, Second Edition (Applied Linguistics in Action) (Routledge 2016.12) は、自己調整理論と学習方略について基本概念を説明し、言語技能、語彙・文法習得への学習方略の適用について論じた理論と実践のバランスのとれた書である。第二言語学習者が中間言語の知識体系を再構築して第二言語に近づけていくプロセスを理論化する処理可能性理論 (processability approaches) の研究事例と評価を扱った書として、Jörg-U. Keßler, Anke Lenzing, & Mathias Liebner (Eds). *Developing, Modelling and Assessing Second Languages* (Processability Approaches to Language Acquisition Research & Teaching) (John Benjamins Publishing Company 2016.6) がある。

## 回顧と展望

言語技能、指導技術の研究には、Rosa M. Manchón & Paul Kei Matsuda (Eds). *Handbook of Second and Foreign Language Writing* (Handbooks of Applied Linguistics) (Mouton De Gruyter 2016.9) と Yo Hamada. *Teaching EFL Learners Shadowing for Listening: Developing learners' bottom-up skills* (Routledge Research in Language Education) (Routledge 2016.7) が興味深い。前者はライティングの理論・指導・評価まで扱う総合的な論集で、後者はボトムアップ処理とシャドウイングによるリスニング指導に特化した研究である。

評価関係では Neil Jones & Nick Saville. *Learning Oriented Assessment: A Systemic Approach* (Studies in Language Testing) (Cambridge University Press 2016.5) が、学習・指導の進展を志向する学習者のための評価のあり方を学習者、教室、社会の文脈で有機的に捉え、能力テストや総括評価の位置づけも含めて体系的に論じている。評価は学習を促進する目的で実施するという前提とそれをふまえた評価プログラムの体系化の試みに賛意を示したい。

第二言語習得の研究手法として、タスクを実行している時の録画・記録を見せ、質問によりメタ認知プロセスなどを想起させる手法などの刺激再生法 (stimulated recall method) についてその特質・活用などを整理した Susan M. Gass & Alison Mackey. *Stimulated Recall Methodology in Applied Linguistics and L2 Research* (Second Language Acquisition Research Series) Second Edition (Routledge 2016.9) は質的研究の精緻化と具体化に示唆を与えてくれる。  
(名古屋外国語大学教授)